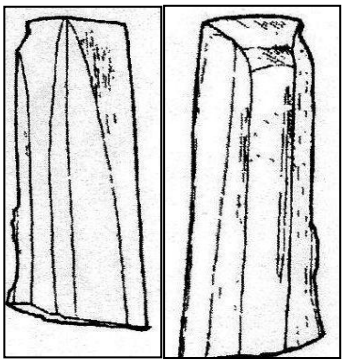
からこかぎ

第37号　令和4年9月28日（水）発行

唐古･鍵遺跡の保存と活用を支援する会
〒636-0247　奈良県磯城郡田原本町阪手233-1　唐古･鍵考古学ミュージアム内
℡ 050-3719-0559　Email：kksien_2004@yahoo.co.jp

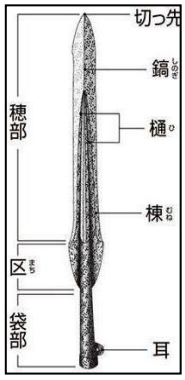
遺物紹介　銅矛片



1　はじめに

今回は、唐古・鍵遺跡南地区（33次調査地）から出土した青銅片を紹介します。遺跡からは青銅製品が32点ほど出土し、大半は銅鏃片（24点）です。多くは中期後半～後期に属し、南地区からの出土例が目だっています。南地区は中期初頭に安定した居住域になりその後に集落活動が活発化するエリアで、中期末には短期間ですが青銅器の工房の存在が推定されている地区です。

今回報告する青銅片は、現在展示されていませんが、リニューアル前までは第２室「木器をつくる」コーナーに展示（右上 模式図）され、「銅矛（どうほこ）」の再加工品と紹介されていました。注目されたのは、その時期が弥生前期末と推定され近畿地方では最古級の銅矛と評価され、さらにその形状より細形銅矛を鑿（のみ）に再加工したものと説明されている点です。



銅矛は両刃の利器（右名称図）で、つけ根の中空部分の袋状の装置（銎 きょう）が特徴で、そこに長い柄を差し込む刺突用の武具です。銎の有無で銅剣と区別されます。身の中央に背骨状の高まりの背（むね）があり袋部と一連です。背の両側には平坦な翼があり、翼の端に刃をつけています。背と刃の間には樋（ひ 血流しの溝）をつけるのもあります。刃は、祭祀用になると研がなくなります。目釘孔をもってなく、袋部の側面端部に半環状の耳（布を結び 柄と結合用途）を付けているのが矛の特徴となっています。また、袋部下部には節帯（段や線）が付いています。鑿は、孔や溝掘りなど加工用の木工具で、木製の柄に付着して使用します。弥生時代は石器が殆どです。鑿は、柄を差し込む袋部を備えたものがありますが、弥生時代は備えていないのが通例です。

2　銅矛の再加工品

(1)　出土遺構　銅矛の再加工品は、33次調査地の土坑（SD-120 長軸3.5m短軸0.9m深さ65ｃｍ～1m）の植物層（4層）からの出土です。4層からは、畿内第Ⅰ様式・Ⅱ様式の少量の土器が共伴して、ミュージアムコレクションでは前期末とされていましたが、今日では中期初頭の青銅器片と報告されています（唐古・鍵遺跡範囲確認調査Ⅰ）。なお、出土土坑は、中期中葉～後葉の大溝（SD-108幅3.4m深さ1.2m）などのの削平を受けています。後述する「埋納」との関連で注目されます。

国内で最も古いと評価されている銅矛は、福岡市吉武高木遺跡の3号木棺墓から出土した細形銅矛（上写真）で、中期初頭と考えられています。唐古・鍵遺跡の出土品が、中期初頭となれば最古級の銅矛となります。

因みに、弥生時代の最古の青銅器は、福岡県福津市今川遺跡の遼寧式銅剣を再加工した銅鏃と鑿です。弥生前期の初めごろと考えられています。遼寧式銅剣は、中国東北部の遼東半島から朝鮮半島に広く分布する青銅製の武具で、朝鮮半島にはＢＣ7世紀（弥生前期）ごろに伝わったと考えられています。

(2)　銅矛片　発掘報告書（1989年概報）によると、暗緑色の長さ3.1cm 幅2.3cm 重さ7.0gで発掘時には確認できなかったと報告されたほどの細片です。表面（模式図左）には、背から樋・翼の部分が残存し、裏面

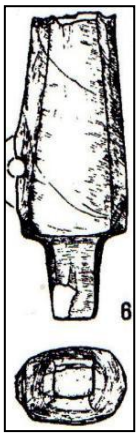
（模式図右）は削り取られていますが袋部が残存（？）しているとのことです。樋の先端部分が残り背が中空で全面研磨されていることで銅矛の残片と判断され、樋の形状から長さ30cmほどの細形銅矛と報告されています。ミュージアムコレクションをみると、鋒（きっさき）の端部の破片と図示されています。

また、「唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅳ」では、鑿の基部端は折損面のままで研磨されてなく、先端部は内面側から斜めに研磨し片刃を付けていると説明文があります。そして、近畿地方の細形銅矛の流入時期を特定できる重要な資料と評価しています。しかし、あまりにも小片のため、肉眼では袋部や研磨痕跡など詳細は確認できません。改めて細形銅矛を確認します。

３　細形銅矛

(1)　銅矛　銅矛はその形状に着目して分類され、①細形（弥生前期末～中期中頃）→②中細形（中期前葉～中期後葉）→③中広形（中期末～後期前葉）→④広形（後期中葉～後葉）と変化していき、後期後葉には姿を消します。細形銅矛は、半島系青銅器文化の伝来を表す舶載品で、全長20cm前後・重量も200g程度で、42cm以下を細形と分類されています。全長43cm以降の中広形や広形銅矛になると大型化し全長は80cmを超え重量も2～3kgに達しています。当初は、武器として一定の実用性を持っていたと思われますが大型化（厚さは変化無し）するに伴い祭祀・儀礼に使われたと考えられています。国内で出土した銅矛は型式がわかるものだけで約480本（伝承を含めると600本余り）、その５割弱の230本が中広形銅矛で、４割弱の180本が広形銅矛です。

(2)　細形銅矛　かつて和辻哲郎氏は、銅鐸が多く分布する近畿と銅剣・銅矛が多く分布する九州とを相対立する文化圏と捉えました。その後、九州北部から銅鐸鋳型が出土し、出雲地方からも大量の銅剣・銅矛・銅鐸が出土しその指摘は見直されています。しかし、細形銅矛は、糸島市久米遺跡・三雲小路遺跡、唐津市宇木汲田遺跡、福岡市吉武高木遺跡・板付遺跡や春日市須玖岡本遺跡など北部九州の22遺跡から出土し、副葬品として26点ほどが確認されています。また、伝来（前期末～中期初頭）からさほど時間を置かずに製作も始まったことが佐賀市惣座遺跡や神埼市姉遺跡から出土した銅剣・銅矛の石製鋳型が裏付けています。惣座遺跡の石製鋳型（右上写真）は、上下が割れた残片（残存長5.2cm幅4.2cm）で表裏2面に細形銅剣・側面に袋部に3条の節帯を持つ細形銅矛が彫りこまれています。その後北部九州を離れて四国・中国地方にも伝播し数多く発見されていますが畿内では本件を除いて確認されていません。



４　多遺跡の青銅祭祀具

しかし、唐古・鍵遺跡からは銅矛を推定する資料が発見されています。西地区の13次調査地から銅矛を模した石製品が出土しています。また、多遺跡からは、青銅祭器と考えられる銅剣が出土しています。

(1)　矛形石製品　13次調査区の中期中葉に掘削され大溝（幅10.5m深さ1.6m）の下層から武器形石製品（上模式図）が出土しています。中期末の洪水の後に後期の溝（幅3.8m深さ50cm）が再掘削されていますので、中期後葉～末の限られた時期のものです。遺跡周辺では見られない緻密な砂質ホルンフェルス（変成岩）を使用し、基部が断面四辺形でしたので当初は磨製石剣の基部と評価されていましたが、現在は「矛形石製品」と分類されています。長さ9.5cm幅3.5cm重さ112.8gの小片ですが「考古資料目録Ⅳ」をみると矛の特徴である袋状の中空装置があり、また側片部に半環状の耳の痕跡もあります。確かに矛を意識した石製品で、

中期後半には矛の情報が伝わっていたことが分かります。但し、矛は半環状の耳は袋部に付いているのが通例ですので情報のみだったものと思われますが、袋部が貧弱で刃をつけず峰が扁平といった武器形青銅祭祀具の特徴をよく備えています。

⑵　多遺跡の銅剣　朝鮮半島からは、銅矛・銅戈・銅剣がセットで伝来しています。何れも大型化して祭祀具となります。銅剣は、四国・中国地方の出土が多いのですが、唐古・鍵遺跡の南西側3kmほどに位置する多遺跡の中期後葉の円形ピット（径40cm）の最下層から「銅剣」（右写真）が出土しています。ピットは、自然流路の堆積土を掘って坑（あな）を穿ち細砂・粗砂（埋納土）を交互に被っていると報告されています。銅剣は、長12.9cm幅3.2cm厚6.5mmの切先峰部の細片で全体の大きさは不明ですが、刃こぼれがあり切先10cmで15～30度曲がっていて地面に突き刺したような使用痕跡が認められています。そこから地面に突き刺す祭祀行為を推定し、青銅武具を祭具として使用していた可能性が指摘されています。そして複数回の突き刺しの後に「埋納」したと考えられます。

５　青銅武具の祭祀

北部九州では銅剣・銅矛・銅戈何れも細形から中細形段階までは副葬品として扱われています。一方、中国四国地方では伝来時から埋納例が目立っていて、逆に中細形段階以降では北部九州でも埋納事例が増加しています。祭祀具としての武器形青銅器は、武威を頼りに天変地異や病気の平癒や悪霊・外敵からの浸入の防御を願った道具です。多遺跡の場合は、円形ピットをみると武器形青銅器の埋納（デポ）の典型例といえます。埋納は「意識的に遺物を埋め納める」と広義に定義されていて多数埋納が基本とされていました。今日では多遺跡の例のように単数埋納も含めて考えられています。問題は、埋納の意図・目的ですが、多遺跡の場合は「地霊を鎮める」集落内での祭祀が想定できます。

同様の祭祀行為は、唐古・鍵遺跡西地区80次調査区の中期後半の溝から出土したヒスイ勾玉２点を収納した褐鉄鉱容器にもみることができます。当該溝は後期に再掘削されその溝底に埋納された可能性を指摘する意見（唐古・鍵遺跡範囲確認調査Ⅰ）もあり、勾玉の形状や蓋に使用した土器（甕）の薄さとも時期的には整合しています。いずれにしても中期後葉～後期の洪水と旱魃の繰り返しといった厳しい気候条件に直面した集落の埋納（祭祀）と考えられます。今回紹介しました銅矛の再加工品も「埋納」という視点でみると、希少な青銅武具に託した集落の「祈り」がみえてきます。

事 務 局 か ら の お 知 ら せ

1 、平成４年度会費について
第７波新型コロナの感染拡大により、例年通りの活動が実施できていません。 そのため、今年度の会費は いただかないこととし､会員資格を引き続き継続することを９月運営委員会で決定しました。

2 、下期の活動について
上半期同様、小学校での総合学習支援活動と遺跡公園での弥生体験・ガイド活動は継続実施します。

3、 バス旅行について
11 月 9 日（水)に、鳥取県青谷町 「青谷上寺地遺跡」を訪れます。 大型バスは手配済みです。
申し込み時期・行程など詳細は HP などを通じてお知らせします。

=先を見通しづらい状況下ですが、ご自愛のほど心よりお祈りいたします。=（今西記）

雑　学　　首長制

1　753論争

(1)　首長　故豆谷和之氏は、唐古・鍵遺跡を「調整者としての長はあっても、支配者としての長は生じえない」と論じ、「大いなる農村」とイメージしました。（「弥生時代の考古学８」 ⑥奈良盆地唐古・鍵遺跡）今回は、階層分化が進み支配者がいた社会「首長制」を報告します。

近年、民族誌や文化人類学の知見を援用し新しい弥生文化論が構築されてきています。特に、考古学の関心が集まる古代国家の成立期をめぐっても、いろいろの説があり「７５３論争」と命名されたこともありました。その評価のキーワードの一つが「首長制」です。

首長制（チーフダム）は、文化人類学が専ら使用している「社会進化の段階」を示す用語で、「古代国家」成立直前の社会を表しています。考古学でもこの概念を使用して、社会の発展段階を表しています。

古代国家の成立の時期について、三つの学説が提示されています。① ３世紀の弥生時代終末から古墳期初頭の卑弥呼が活躍した時代、② ５世紀の倭の五王とりわけ雄略大王の時代、③ ７世紀はじめの推古朝あるいは７世紀後半～8 世紀初頭の律令体制の確立した時期です。何れも考古学的事実の例証は十分ではなく、中国史書を含め文献資料を重視した見解です。なお、集落や墓域での個人の優越性（リーダー）を表す際に時期に拘り無く慣用的に「首長」という単語が使用されていますが、首長制社会の首長とは区別したい用語です。

(2)　国家　文献史学では、日本列島中央部に国家が成立した時期は７世紀後葉前後とみるのが定説となっています。白村江の戦い後の天智朝の改革にその基礎を持ち、大宝律令の制定に至る時期に求めています。律令の制定を画期として、国家が持つ支配制度や経済社会制度が確立し国家の領域支配が確立したと想定しています。一方、先史考古学の分野では国家形成のプロセスが最大の関心事で、国家の前段階に「初期国家」概念を設定する試みがなされています（「国家形成の諸段階」都出比呂志 歴史評論 1996-3）。また、後述する人類学の進化モデルを援用し移行プロセスを詳細に分析する試み（首長制社会論）も注目されます（「日本古代の首長制社会と対外関係」鈴木靖民 歴史評論 1996-3）。

1）初期国家論　初期国家論は、文献史学の国家形成の視点が７世紀初頭の畿内政権の動向（成立）を予め規定事実（与件）化した構成で古墳時代を軽視しているとの反省から、律令国家（成熟国家）に先行する国家成立の前半段階（古墳時代）を「初期国家」と捉えています（首長制→初期国家→成熟国家）。この考えでは、弥生時代を初期国家の前段階で「首長制社会」と位置づけています。

なお、初期国家論では次のように「初期国家の成立指標」を想定しています。

① 租税徴収と労働力の徴発が発生し<u>強制力をもつ中央権力機構</u>が出現する。② 首長・中間層・一般成員といった<u>階級</u>が形成される。③ 血縁中心から<u>地縁を重視する社会編成</u>が進行する。④ 物資の流通面では上下関係が生じ共同体内外で<u>貢納関係</u>が生じるなどの変化に注目しています。確かに、いずれの指標も弥生時代終末期の北部九州や吉備・出雲・丹後地域など先進地域でも全く見当たらない事象です。

2）首長制社会論　首長制社会論は、国家成立前の社会構成や発展過程を実証的に解明しょうとする意図を強く持っています。部族社会（平等社会）→首長制社会（成層社会）→原初国家（古代国家 階級社会）というモデルを基に、国家成立の時期を７世紀末とし、それ以前の社会は地位や身分差があるものの社会経済的変化や政治的階級は存在しないとして首長制社会に該当するとしています。この考えは、古墳時代を首長制社会（部族社会とする意見もある）にあて、弥生時代を部族社会とするか首長制社会とするか意見は分かれています。

なお、国家の要件として、①領地と②そこに住む人々と③それらを管理する「統治システム」の３つの要素を政治学では挙げています。特に、官僚組織と軍事組織など統治システムが重要視されています。首長制も広義の「統治システム」の範疇に含まれる用語ですが、統治レベルは国家と比べると低いのが特徴です。

２　統治システム

(1)　社会の分類　集落をはじめ社会の秩序を維持するために個人や集団の行動や活動を管理・統制する仕組み（統治システム）は旧石器の時代からあり、いわば人々が生きるための知恵といえます。この統制システムの解明は、文化人類学が専ら対象とした学問分野で、１９７０年代に「社会進化」の過程を類型化（モデル化）したのがアメリカのＥ・サーヴィスなどで、次の４段階を設定しています。

①「バンド」②「部族」③「首長制社会」④「国家」です。親族集団に焦点をあてた古典派と称されるＬ・モルガンやＦ・エンゲルスなどと異なり、多様性を持つ社会組織を総合的に評価し社会の発展過程を的確にモデル化しています。また、古典派が重視する男女の婚姻関係や家族関係など墓制に表れる集落の構成原理の変遷も評価の対称として包含しています。なお、冒頭に述べましたとおり、考古学では独自の識別基準を持っていませんので多くはこのモデルを採用しています。

(2)　バンド　「バンド」は、採集狩猟民などにみられ血縁を核とし、父系・母系ともに見られる双系の家族労働中心の小集団（出自集団）です。社会を維持するのは道徳的な規範や信仰で、成員のコンセンサスを重視するのでリーダーは畏敬の対象で象徴的存在となります。１万年以上続いた縄文社会は典型的なバンド社会といえます。しかし、環状集落の構成や集石遺構・環状列石などの墓域の調査に加え人骨の歯冠計測など遺伝的形質の分析などにより、縄文時代はある時期から複数の血縁親族集団で構成される「部族社会」であったとする意見が大勢となっています。

(3)　部族　「部族」（トライブ）は、拡張された親族集団や統合性を持ったバンドによって結ばれた一定規模の地域集団です。幾つかの出自集団により部族社会は分割されていますが、共通の言語や文化を持っています。その多くは共通に祖先を持つ間柄と信じる人々から成る擬制的出自集団（**氏族　クラン**）により構成されています。氏族は族外婚集団で、婚姻により社会的ネットワークを構築する側面をもっています。
また、系譜的繋がりがあると信じられる氏族間では大きな連合体を形成し「**胞族**」となり、大規模な地域集団を形成します。これらは考古学的事象としては捉えにくく、集落や墓地の配置や人骨のＤＮＡ分析などにより徐々に明らかになってきています。

部族社会では、人口の増加により集団を統率するリーダー（ビッグマン）が誕生しますが、自治的な地域集団ですので特殊技能や人望などの属人的「権威」で集団を組織化しています。従って、リーダは世襲ではありません。但し、氏族創始者に対する遠近差に応じて序列（円錐クラン）があります。

弥生時代は、部族社会に属することは確かでしょうが首長制社会にまで移行しているか意見が分かれています。古墳時代を擬制的血縁関係を基盤とする社会とみる意見では、弥生時代は部族社会と評価しています。

３　首長制社会の特徴

首長制社会は、前述のとおり部族社会から国家への移行過程に出現する統治システムです。バンドや部族社会は、家族・親族関係などで結合した経済的、政治的に自立性を持った平等社会でした。しかし、首長制社会は技術の進歩や集約化が進んだことにより余剰資源の確保が容易となり、人口も増加し社会生活は複雑化します。技術が進み職業の専門化が階層分化を促し、権力は特定個人や集団に帰属し地域社会はその支配

下となる成層化した社会となりますが、再分配のシステムは持続し平等性は残存しています。

首長制と国家は次の点で大きな相違があります。まず、① 首長は存在しますが成員との血縁原理を軸として成立しています。この血縁原理の払拭が国家成立の重要な要件となります。② 階層はありますが階級的支配者は不存在です。階級の出現は国家の重要な指標となります。③ 権力は個人的威信に拠っていて、国家のように法や軍事力や官僚組織に裏付けられていません。④ 首長は共有の倉庫群を管理しますが、国家のような貢献（苦役）や徴税システムは持っていません。

因みに、階層と階級は区別される概念です。有形（経済性）・無形（非経済性）を含めた社会的資源の財産が不平等に分配されるのが「階層社会」ですが一部は平等性が残っていて、集められた財貨は再び分配されます。一方、支配・被支配関係が成立する「階級社会」では、社会資源のうちの財貨に注目し、財貨を管理所有する立場と労働力を提供する立場とに社会が分断し、分配されずに手元に留まります。このように、階層と階級は、資源の分配システムに着目した概念です。

４　資源の分配・交換

(1)　資源分配システム　資源の分配・交換のシステムは、社会の重要な統合原理（「互酬性」という）で、社会・政治的組織と密接に関連していますので、経済人類学の分野で盛んに研究されていました。今日では、互酬性（ごしゅうせい）は、主に①一般的互酬性　②均衡的互酬性　③再分配　④市場交換に分類されています。　①②の一般・均衡的互酬関係は集団の結束力を強化する働きをし、①は親子関係のように見返りを期待しない贈与から、②は１対１の等価的資源の交換で相互依存の連帯関係を形成します。①②の互酬関係は、経済的機能のほかに社会的威信の形成や政治的結合機能を備えていきます。③の再分配は、遠隔地の貴重な資源を交換する際に、有力者の手元に集積しその後分配するシステムです。④は交換⇔分配と異なり市場経済原理が成立し取引の市場とそれを維持する軍事力が具備されます。③の再分配システムに基づく遠距離交易は、有力者の社会的威信の向上をもたらすと考えられています。資源の分配システムは、先述の社会進化モデルとも概ね整合していますが、③の再分配を部族社会とするか首長制社会とするか見解は分かれます。

(2)　威信材システム　最後に、首長制社会の首長が持つ権力の源泉を確認します。従前は、生産力の向上を背景に農作物の生産と分配といった経済的側面や他者を制圧する軍事力や大型構築物（祭祀センター）などのモニュメント性などが重視されていました。しかし、近年は身分や威信など非経済的財産の側面が注目され、特に③の再分配を支える「威信材システム」に論議が集中しています。貴重財は、希少性の高い財物ですが、社会的威信を高めそして政治的威信に転化する「**威信材**」と区別されています。首長制では、首長が下位の者に贈与・交換を通じて相互の関係を確認し、さらに地域間においても同盟関係を構成する威信材の機能を重要視されています。

しかし、富と人望による権威が人々を組織化する部族社会の場合、リーダーは互酬関係を利用して富や名声を拡大させ、さらに集落の範囲を超えて遠隔地域の交換パートナーと儀礼的交換により多くの財の贈与を得て、その財を地域内に分配をしてその権威を維持・拡大させます。このように調達・分配そして隔地域間交流などの構図は、首長制社会の首長と部族社会のビッグマンと余り差異は無いようにも思えます。

国家形成や移行プロセスの検討にあたっては、古墳時代の評価が重要な論点となります。しかし、それ以前の弥生時代を部族社会とみるか首長制社会とみるか前述の通り意見は分かれ、継続する古墳時代の評価にも及んでいきます。本報告では、結論には至りませんでしたが、引き続き検討したい課題といえます。

三雲・井原遺跡～伊都国の王都

１　伊都国～魏志倭人伝

三雲・井原（みくも・いわら）遺跡は、福岡県西部の糸島市に所在する縄文時代後晩期から古墳時代まで継続する集落遺跡です。糸島は玄界灘に突き出た半島で、北側の半島部（シマ）と南側の付け根部（イト）からなります。この範囲が伊都国と想定できます。魏志倭人伝には、末蘆国（隣接の唐津市周辺）から東南に陸上を五百里行くと伊都国に到着するとの記述（「東南陸行五百里 至伊都國」）があります。伊都国には千余りの家があり、代々王がいてみな女王国に属しているともあります（「有千余戸 世有王 皆統属女王國」）。三雲・井原遺跡内には三雲南小路遺跡、井原鑓溝遺跡と西側の曽根丘陵上の平原遺跡の厚葬墓（何れも怡土平野内）があり、伊都国の王墓と考えられていました。今回は、「王墓」を紹介し、伊都国を垣間見ます。

２　糸島地域～伊都国の範囲

糸島（右上遺跡図）は、南に井原山・雷山などの背振山系、東は高祖山と博多湾が画し、北と西は玄界灘に面した東西 17km 南北 10km 程の地域です。イトとシマの接続部には幅 1km の低地帯があり、外海に連なる東西２方向の内海（ラグーン）を持った天然の良港があったと想定できます。三雲・井原遺跡は、雷山などから３河川が運んだ土砂の堆積により形成された怡土（いと）平野の中心部に位置し、南北 1500m、東西 750mの約 60h の広範囲に及んでいます。怡土平野には、雷山や井原山の裾部から舌状に延びる段丘面が形成され、遺跡は低位段丘上（標高３０～44m）にあります。糸島地域は、遺跡図をみると段丘面で区画された小平野ごとに遺跡が散在しています。酒井龍一氏（奈良大学名誉教授）は、生活資源の調達方法に畿内と北部九州に違いがあるとし、北九州の場合は自己完結的に生活物資の調達ができる地理的条件が備わっていると指摘しています。糸島は、山や海に囲まれた地域で、生業・防御面のみならず、地域集団がまとまり易い利点があります。

３　井原南小路遺跡～中期後半の厚葬墓

(1)　井原南小路遺跡　江戸時代の文政５年に、遺跡南西部の南小路（みなみしょうじ）地区の畠から１号甕棺墓（右写真）が発見され、150 年後の 1975 年の調査で隣接した２号甕棺墓が発見されました。遺跡は、周囲に幅３～5mの周溝をめぐらした中期後半の大規模な方形周溝墓（東西32m 南北31m）です。１号墓からは、中国製と考えられる金銅製四葉座金具（８個体分 古代中国の木棺飾り金具）やガラス璧破片（８個以上古代中国祭祀用玉器）や銅鏡 （前漢境３５面以上）のほか中細銅剣・銅矛・銅戈やガラス勾玉・管玉などが出土したと古文書に記録されています。一方、２号墓からは、金銅製の四葉座飾金具・銅鏡（前漢鏡 22 面以上）やヒスイ製・ガラス製勾玉、管玉などが出土しています。この周溝墓は、豪華な副葬

品や墳丘の大きさから伊都国の最古の王墓と考えられています。中期後半は北部九州に楽浪系漢文化が流入する時期で、奴国王墓と比定される須玖岡本Ｄ地点甕棺墓と副葬品の種類・量が概ね共通しています。

方形周溝墓の北側にはＬ字形の溝が検出され、高祖山との位置関係から祭祀溝（祖霊祭祀）と報告され、築造後も周溝が何度も掘り返された跡があり継続した祭祀が予測されています。古墳期初頭まで存続する方形区画溝（一辺 50m）が掘削され、首長居館とする意見もありますが内部は未調査ですので実態は不明です。付近から小規模の掘立柱建物（1×2 間）が複数検出され倉庫群と想定されています。注視したいのは、並列する２基の厚葬墓のみが周囲の墓域と離れて埋葬されている点です。この時期の北部九州では、福岡市吉武遺跡群や比恵・那珂遺跡群などで多数の甕棺の列状墓（集団墓）が検出されています。この厚葬墓の評価には、中期後半以前の遺跡の様相に留意し、糸島地域で多く発見される朝鮮半島伝来の「支石墓」（墳墓形式）に着目しました。

⑵　**大型支石墓**　弥生早期から前期になると、遺跡北側の河川付近で大型の上石を持つ井田用会（いたようえ）支石墓・井田御子守（おこもり）支石墓・三雲加賀石支石墓・石ヶ崎遺跡支石墓（曽根丘陵東端）が確認され、いち早く渡来系文化が伝わっていたことが分かります。

糸島地域では新町遺跡（シマ部）・志登遺跡（以下イト部）・長野宮の前遺跡、 石崎曲り田遺跡、石崎矢風遺跡（右上写真）など著名な支石墓が多く発見され、早い時期から朝鮮半島との人的交流があったことが推測できます。散在する支石墓群から、集団が祖先崇拝といった アイデンティティ（自他同一性 集団の一員であるという共通認識）を共有していた可能性を推測できます。氏族（クラン）は、共通の祖先を持つと信じている人々から成り立つ「擬制的出自集団」です。系譜関係が明確な単系出自集団（リネージ）と異なり近接地に住まなくとも相互の協力関係をもつのが特徴です。井原南小路遺跡の２基の厚葬墓は、中期後半になり地域内に有力氏族（クラン）の族長が出現したことを示しています。但し、有力血族集団が階層的に現れたものでなく、少数墓で小児墓を含んでいないので長老など地域内で選ばれたリーダー（族長）の墓と考えられます。改めて厚葬墓出現前後の三雲・井原遺跡と糸島の小平野に分散している集落遺構を確認します。

⑶　**三雲・井原遺跡**　縄文後晩期には遺跡の北側では、在地の縄文系の人々の生活痕跡が報告されています。三雲加賀石支石墓の周辺では前期中葉の径 130m 規模の集落域と墓域が確認されています。前期後半になると遺跡の中央部や南地区で集落域や墓域が確認されます。そして、中期になると、一部住居域の不明の地域もありますが墓域は集落全域で散見されます。そして、中期後半では、遺跡内の北部地区から中央地区や南部地区さらに南西部にも集落域が拡大し後期まで継続します。この時期に、遺跡は最盛期を迎え３箇所で大型厚葬墓が築造されています。

⑷　**糸島地域の動向**　前期段階では、墓域は既にシマ部の新町遺跡やイト部の広田遺跡・今宿遺跡・周船寺遺跡・長野宮の前遺跡（支石墓２基を含む３９基の墳墓群）・石崎矢風遺跡（支石墓４基を含む 55 基の墳墓群）・石崎大坪遺跡（23 基の甕棺墓群・早期前期の水田跡）などで甕棺墓が検出されています。また、集落遺構もイト部の周船寺（すせんじ）遺跡・上深江小西遺跡（縄文後期の集落跡・早期から継続する掘立柱建物群）・石崎曲り田遺跡などで確認されていて徐々に活発化していきます。特に、石崎曲り田遺跡は、竪穴住居（30 棟）や支石墓１基・甕棺墓７基に加え多様な半島系磨製石器や紡錘車・板状石斧・曲り田古式土器が出土するなど注目されている標識遺跡です。なお、上深江小西遺跡からは佐賀県伊万里市腰岳産の大量の黒曜石が発見され縄文時代からのサヌカイトを含め石材の中継基地（旧来の流通経路）と想定されています。

中期になると墓域がイト部を中心に幅広く確認され、武器形青銅器や玉類など副葬品も増加します。シマ北部の丘陵部の久米遺跡の中期前半の甕棺墓（24 基）の２基から細形銅剣・銅戈・管玉が副葬され、旧海岸線に近接するイト部の潤地頭給（うるいじとうきゅう）遺跡では 300 を超える甕棺墓が検出され円環形銅釧５点が副葬されています。また、支石墓の上石も発見されている木舟三本松遺跡からは 69 基の甕棺墓群中 19 の甕棺に良質の勾玉や管玉や石剣などの武具が副葬されています。一方、集落遺構はシマ部の一の町遺跡・御床（みとこ）松原遺跡・泊リュウサキ遺跡・元岡桑原遺跡、イト部では今宿五郎江（いまじゅくごろうえ）遺跡（掘立柱建物中心）が確認され、一の町遺跡を除き全てが旧海岸線上に面しています。その中で、御床松原遺跡からは漁撈関係の遺物が出土する一方対外交流を示す貨泉などが出土しています。また、内陸部の一の町遺跡からは住居遺構が 30 棟以上検出されそのうち大型建物が４棟（最大規模 95.2 ㎡）も含まれ、海岸部の集落と離れたシマ部中央に大規模集落が存在しています。海岸部と離れた後背地（ヒンターランド）の大規模集落の構図は、イト部の三雲・井原遺跡も同じです。

また、今津湾（西側内海）沿いの今宿五郎江遺跡の大溝（最大幅 13m）から漁具・農具・日常用具の木製品や紡錘車・砥石や祭祀用の丹塗土器などが出土し漁撈と低位段丘面の傾斜を利用した水田経営（畠作農耕を含む）を生活基盤としていたことが分かります。なお、中期以降に三雲・井原遺跡（旧海岸線の集落域を含め）が活発化する要因として、今津湾に突き出た今山（標高 80m 中腹に剝片多数）の玄武岩を利用した石斧の流通に関わっていたとする意見が有力です。今山産の玄武岩石斧は、半製品（敲打仕上げまで）で供給され、中期以降では北部九州各地から東は豊前・西は佐賀平野・南は有明・八代湾に面した宇土半島まで及んでいます。早くから広範囲の流通ルートを確保していた糸島地域（伊都国）の強み（特徴）といえます。

４　井原鑓溝遺跡～後期中葉の厚葬墓

天明年間に鑓溝（やりみぞ）から壷棺が発見され、銅鏡（方格規矩四神鏡）21 面・巴形銅器・刀剣の類・板状の鎧の一部が出土したと記録されています。その所在地は不明ですが、拓本や作図から弥生後期中葉以降の墓と考えられています。また、平成１６年に鑓溝地区の道路工事に伴う事前調査で甕棺墓・石棺墓と多くの木棺墓（楽浪系漢文化の墓制）が検出されました。調査地中央の一際大きな１号木棺墓（上写真 赤色顔料塗布）では銅鏡１面（方格規矩四神鏡）とガラス小玉（170 個）が副葬されています。他の木棺墓１基からも銅鏡（方格規矩四神鏡）そして大半の木棺墓からはガラス小玉が副葬されていました。井原鑓溝遺跡周辺の木棺墓中心の墓域や副葬品の格差は、氏族共同体の中での階層分化（円錐クラン）の表れと捉えることもできます。井原鑓溝遺跡を「後漢書」に記載される倭国王「帥升」にあてる説もありますが副葬品から王墓でなくそれを支えた「将軍墓」とする意見が大勢です。倭人伝では、伊都国には長官１名副官２名（「官曰爾支 副曰泄謨觚・柄渠觚」）そして一大卒（将軍相当職）を常に伊都国に置き治めていると伝えています。（「自女王國以北　特置一大率檢察　諸國畏憚之　常治伊都國　於國中有如刺史」）

５　平原遺跡～後期末の厚葬墓

昭和 40 年に発見された平原（ひらばる）遺跡１号墓（右写真）は、三雲南小路遺跡の西側の中位段丘上にあって、割竹形の木棺墓（長３m 幅 1m）をもった四隅の丸い方形周溝墓（14m×12m）です。その副葬品は、国内最大の径 46.5cm の後漢鏡の内行花文鏡５面、青銅鏡（方格規矩

四神鏡など）35 面、ガラス勾玉３個、丸玉 500 個以上、身が細い素環頭大刀（そかんとうたち）１本などで、副葬品の構成より女王墓とみる意見もあります。時期は、弥生後期後半から終末期と考えられています。１号墓をみると特定個人墓の段階といえますが、その後の調査で１号墓を中心に５基の方形周溝墓（時期が異なる）が確認されています。ほぼ同時期の２号墓からは銅鏡片２面が出土しています。１号墓の副葬品は一括して国宝に指定され三種の神器の八咫鏡（やたのかがみ）との関連が注目されていますが、墳墓の評価が重視されます。二つの可能性があり、一つは階層分化が進んだ有力クランの族長の墓か、一つは地域内クランで選ばれた優位な職能を持つ族長の墓とみるか意見は分かれます。なお、同じ時期に槍溝に隣接する寺口地区（三雲寺口遺跡）の箱式石棺墓から中国鏡（銘内行花文鏡）が検出され、井原鑓溝遺跡にみられた青銅器などの舶載品（威信材）の分配が氏族共同体（クラン）内部で引き続き行われていたことが分かります。

６　王墓の評価

王墓は、そこに集約された社会構成や経済構造や政治的権力などを表しています。そこで、王墓誕生の要因に関心が集まりますが、擬制的出自集団（氏族 クラン）は、族外婚などにより広範囲のネットワークを構築し地域連合体を形成する民族事例があり、三雲・井原遺跡の範囲だけでなく糸島地域総体で評価する必要があります。ここでは、王威の源泉とされる威信材システムを支える長距離交易の痕跡を確認します。

糸島地域では、泊遺跡群・一の町遺跡などシマ部２ヶ所、曲り田遺跡などイト部９箇所で碧玉などを使用した玉造り遺跡が 11 箇所（中期以降）も分布し、その殆どが旧海岸線に面しています。松江市花仙山産の碧玉を多く使用した潤地頭給遺跡周辺（西海岸部）と今宿五郎江・大塚遺跡周辺（東海岸部）が最大規模です。特に、地頭給遺跡からは南北 120m 東西 80m の範囲に玉造工房跡が 30 棟（後期～古墳時代前期）検出され、碧玉・水晶・メノウなど他地域の原材料を使用していました。遺跡からは、準構造船の部材や石製スズリの未成品も出土して広範囲の交易を裏付けています。

また糸島地域からは、福岡平野（出土遺跡単位１・２点）などと異なり半島系や楽浪系土器が際立って出土し、楽浪郡設置以降の青銅器・鉄器・玉類などの長距離交易を裏付けています。シマ部では御床松原遺跡・一の町遺跡・元岡桑原遺跡、イト部では曲り田遺跡・深江井牟田遺跡・今宿五郎江遺跡・浦志遺跡・潤地頭給遺跡など一の町遺跡以外は全て旧海岸線に面した遺跡から出土しています。その中でも三雲・井原遺跡が量的に格段に多くて、遺跡北東部（番場調査区 88 ㎡ ）からは楽浪系土器（50 点ほど）がまとまって出土し、石スズリも発見されています。これらの関係は、魏志倭人伝の（帯方）郡の使者が倭国に来た際には、伊都国が港（津）にて調査確認するとの記述（「常治伊都國　於國中有如刺史　王遣使詣京都帯方郡諸韓國及郡使倭國　皆臨津搜露」）があり、伊都国には郡の使者が留まったとの記述（「郡使往來常所駐」）を裏付けています。。

三雲・井原遺跡と周辺集落との関係は、冒頭に述べた地理的条件を踏まえ糸島地域の集落配置（各クランの分立）をみると、拠点集落一衛星集落といったピラミッド型でなく同質的な地域社会（経済的・政治的自立性を有する）であったと思われます。また、旧海岸に面した低位段丘面に弥生時代の早くから分散した集落（出自集団）を形成し、その多くは半島由来の支石墓をもつなど地域内では祖先崇拝を共有し擬制的血縁関係を保持していた可能性があります。一方、墓制には墳丘や副葬品に格差がみえ、氏族共同体内部での階層分化（円錐クラン）がみえてきています。三雲・井原遺跡は、部族社会から首長制社会へ緩やかな移行する過程の部族社会の集落であったとみることができます。

（編集委員）　谷口敬子　筒井和子　万徳順一　水野日出男　宮川真由美　井上知章（文責編集員）